

キャリア形成プロセスにおける格差の男女比較研究

——無業経験に着目して——

東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野修士課程2年 麦山亮太

目次

序章	1
第1章 無業経験の位置づけ	10
第2章 無業経験の偏りとその帰結	19
第3章 方法——無業経験という変化を捉える	29
第4章 だれが無業を経験するのか	39
第5章 無業経験と階級間移動	52
第6章 無業経験が正規雇用獲得に与える影響	67
第7章 無業経験後の賃金の低下	82
終章	94

要約

序章

社会階層研究において、人びとが労働市場のなかをどのように移動し社会経済的地位を上昇・下降させていくか、というキャリア形成プロセスは主要な問題関心の一つである。キャリアは仕事の配列 (Sequence of jobs) として捉えられるように、仕事から仕事への連続性と時間による変化が重要な特徴である。

労働市場に内部と外部が存在する。これまで、労働市場における移動を捉えるとき、その多くは労働市場内の移動がどのように水路づけられているかに関心を向けていた。他方で、人びとは常に労働市場内部にとどまり続けるわけではなく、労働市場をいったん退出し、再び労働市場へと戻ることもままある。本研究ではこれを無業経験と呼ぶ。無業経験がキャリア形成プロセスにとってどのような意味を持っているか、これまでの社会階層研究では十分に明らかになってこなかった。しかし、近年の雇用の流動化と女性の就労の増大を背景に、無業経験は増加していると考えられ、これを分析する必要性は増してきている。

さらに、無業経験に着目する際、男女の比較は欠かすことのできない視点である。これまで、間断のないキャリアを歩み無業を経験しない男性と、結婚・出産期に就業を中断しキャリアが切断される女性というふうに、無業経験という観点から見れば両者は別々の枠組みで分析されてきた。しかし、先述したとおり、男女のキャリアは徐々に近づきつつある。こうしたなかであって、男女を比較して、何が男女に共通する特徴であるのか、何が男性に、あるいは女性に特有の特徴であるのかを見極めることが重要と考えられる。

以上の背景のもと、本研究は、無業経験を通して、キャリア形成プロセスにおける格差を男女を比較しながら検討する。より具体的には、無業経験が社会経済的地位によってどのように不平等に配分されているか、また無業経験がその後の社会経済的地位にどのよう

な影響を与えるか、という点につき、男女を比較しながら明らかにする。

以下の2つの用語につき定義を明確にしておく。第1に、「無業経験」である。これは個人が労働市場からの退出（有業から無業となること）を経験することとして定義される。本研究における無業経験は、学校教育終了後から退職期までの働きざかりの期間において生じるもののみを扱い、学校教育終了後に仕事に就かないことによって生じるもの、および高齢期の退職によって生じるものは対象としない。第2に、「社会経済的地位」である。これは個人が労働市場において有する地位として定義され、無業者は社会経済的地位を持たないものとする。したがって、世帯を単位としたときの生活水準の豊かさについては問題としない。本研究で格差あるいは不平等というとき、それは労働市場における位置とそれに付随する社会経済的地位、および不安定な社会経済的地位への移動をもたらすリスクの配分が人びとの間で異なっていることを指す。

第1章 無業経験の位置づけ

本章では、日本における無業をめぐる現状を既存のデータを用いて整理し、さらに無業経験が初職・現職連関で代表されるキャリアのあり方を変化させることを確認した。

まず、「労働力調査」および「就業構造基本調査」から、現代日本において、無業者はとくに女性により多いが、就業を希望する無業者は決して少なくないことを確認した。

ついで、時系列的にみると、男性であっても無業を経験する割合は増加しており、かつ、女性であってもいったん無業となつてから再び労働市場へと参入する割合が増加しつつあることを指摘した。こうした変化は、男女とも、無業経験をもちながらも労働市場に留まり続けるという傾向が現れていることを意味している。すなわち、無業経験という点でみれば男女の差は縮まりつつある。

ただし、キャリアにおいて無業経験がどのような意味を持っているかは男女で異なっている。男性は仕事に関する理由で無業を経験する一方、女性はそれ以上に家族に関する理由がより重要である。

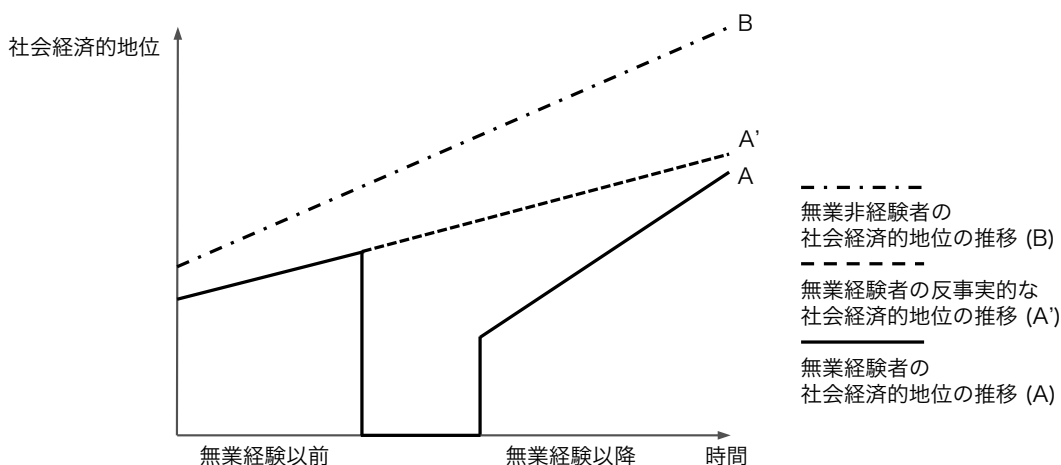
こうした違いにもかかわらず、無業経験は男性にとっても女性にとってもキャリアに大きな変化をもたらす。「2005年SSM調査」を用いて無業経験の有無別に初職・現職のクロス表を作成したとき、無業経験をもつことによって、初職・現職の連関が大きく変容することが見てとれる。本研究は、こうした変化がどのように生じるかを明らかにするために、キャリア形成プロセスの内部に立ち入ってより細かな関連について検討していくものとして位置づけられる。

第2章 無業経験の偏りとその帰結

本章では、先行研究において無業経験がどのように研究されてきたかを概観し、そのうえで本研究の位置づけを示した。

キャリアは、時間によって社会経済的地位が変動していくプロセスと見なすことができる。このとき、無業を経験する仮想的な個人のキャリアは、図2.1のように表すことができる。個人は、無業を経験することによって一時的に社会経済的地位を失い、その後再び労働市場に戻ったときには、それ以前よりも低い社会経済的地位に置かれ、その後も持続的に不利な地位に留まることとなる。

図 2.1 キャリアの線と無業経験による社会経済的地位の変化



無業経験とキャリアとの関係を見る際に着目すべきは以下の2点である。第1に、社会経済的地位が無業経験に与える影響についてである。第2に、無業経験がその後の社会経済的地位に与える影響についてである。ここで取り上げる先行研究も、基本的にこの2つの側面のいずれかに対応したものである。

第1に、社会経済的地位が無業経験に与える影響に関する研究をレビューした。分断労働市場論 (Segmented labor market theory) によれば、無業への移動は、より社会経済的地位の低い層において生じやすいものと予想される。これを踏まえて、経験的な研究の知見を整理した。具体的には、失職・離職に関する研究と、女性の就業中断に関する研究の2つを取り上げた。

第2に、無業経験が社会経済的地位に与える影響に関する研究をレビューした。無業経験がその後の社会経済的地位に対して負の影響をおよぼすと見られるが、それを説明する理論として、人的資本理論 (Human capital theory)、シグナリング理論 (Signaling theory)、ジョブ・サーチ理論 (Job search theory) の3つを取り上げた。そのうえで、経験的な研究の知見を整理した。具体的には、失業・無業の傷跡効果に関する研究、それに加えて転職の帰結に関する研究と結婚・出産ペナルティに関する研究の3つを取り上げた。

これら先行研究のレビューを受けて、本研究の位置づけおよびその貢献は以下の3点に整理される。第1に、労働市場における移動のなかでも、行き先が無業であることを特定化し、社会経済的地位がこれに与える影響を明らかにする点である。日本を対象とした離職に関する研究は、社会経済的地位が離職の生起に与える影響を明らかにしてきたが、その際に、仕事を離れたあとの行き先を特定していなかった。また、女性の就業中断に関する研究は、対象とするライフステージを結婚・出産期に限定しがちであった。本研究はこれに対して、より広いライフステージを対象に、仕事を離れて無業に移動するという現象を扱う。

第2に、無業経験が短期的・長期的にキャリアにおよぼす影響を明らかにする。日本においては、キャリアにおける移動の生起に焦点が当たる一方、それがどのような帰結をもたらすかについては研究蓄積が乏しい。とりわけ本研究の対象である無業経験に関してその傾向は顕著である。本研究は、キャリア全体というより広い視座に立ち、無業経験はそ

の後のキャリアをどのように変質させるのかを明らかにする。

第3に、男女を比較しながら分析を行う。第1章で確認したとおり、無業経験という観点からみれば、男女のキャリアの距離は縮まりつつある。一方で、労働市場と家族がキャリアにおよぼす影響は男女で異なっており、そのキャリア形成プロセスは同一ではないだろう。これまでの研究で、男女の比較を明示的に行った研究は多くない。本研究では、男女を同一の水準で比較しながら分析することで、なにが男女に共通しており、何が男性(女性)の特徴であるのかを明らかにする。

第3章 方法——無業経験という変化を捉える

本章では、本研究の採用する分析枠組みおよび用いるデータを提示する。

本研究の分析枠組みの要点は、(1)社会経済的地位と無業経験との関係を時間を考慮しながら分析する、(2)社会経済的地位を多元的な指標(階級・雇用形態・賃金)により測定する、(3)男女それぞれに同一のモデルを適用しながら比較する、という3点に要約される。

(1)では、これを適切に分析するための手法として、イベントヒストリー分析と固定効果・ランダム効果モデルを取り上げ、この内容および意義について触れた。イベントヒストリー分析は、有業から無業への、無業から有業への移動を捉えるために適している。固定効果・ランダム効果モデルは、同一個人内の時間による社会経済的地位の変化を明らかにするために適している。(2)では、階級・雇用形態・賃金という3つの社会経済的地位の位置づけおよびその重要性について確認した。これらの区分はとくに無業経験がその後の社会経済的地位に与える影響を明らかにする際に用いる。(3)では、適切な男女比較を行うために、男女に対して同一のモデルを適用して分析することを述べた。

本研究で用いる社会調査データは以下の2つである。第1に、「社会階層と社会移動全国調査、2005年」(以下、2005年SSM調査)である。これは第4-6章の分析で用いられる。第2に、「東大社研・若年パネル調査wave1-6, 2007-2012」「東大社研・若年パネル調査wave1-6, 2007-2012」合併データ(以下、JLPS2007-2012と表記)である。これは第7章の分析において用いられる。これらのデータは、個人の社会経済的地位の変化を捉えることができるという点で、本研究の関心に合致するものである。

第4章 だれが無業を経験するのか

本章では、2005年SSM調査を用いて、無業経験が社会経済的地位によってどのように異なって配分されているか、およびそこにかなる男女差があるかを検討した。

日本を対象にした離職に関する研究は、仕事を離れた後の行き先を明示してこなかった。また女性の就業中断に関する研究は、その関心を結婚・出産期に集中していた。本章は、行き先を無業と特定化したうえで、より広いライフステージを対象に、社会経済的地位のもつ影響を明らかにするものとして位置づけられる。

イベントヒストリー分析を用いた分析の結果、以下の点を明らかにした。男女とも、社会経済的地位と無業への移動は無関係ではなかった。男性においては、非正規雇用や小企業勤務、あるいは無業経験を重ねると無業への移動確率が高まり、社会経済的地位が低いほど無業への移動が生起しやすいという明瞭な傾向がみられた。他方女性においてはこうした傾向は明瞭でなく、代わってライフステージの効果がより重要であった。ただし、社

会経済的地位の効果はライフステージによって異なっており、それが社会経済的地位が無業への移動に与える効果を見えにくくしていたものとみられる。

第5章 無業経験と階級間移動

本章では、2005年SSM調査を用いて、無業経験によって、どの程度階級の変動が生じるか、男女を比較しながら分析した。

世代内の階級移動については多くの研究が蓄積されていたが、無業をどのように扱うかについては統一的な見解が得られていない。本研究では、無業を挟んで、それ以前の階級とそれ以後の階級との関係を見ることでこれにアプローチする。

ログリニア・モデルを用いた分析の結果、以下の点を明らかにした。まず、無業経験は初職と現職の連関のパターンを変化させ、とくに初職と現職とで異なる階級への移動を促す。男性は無業経験によって異なる階級への移動が頻繁に生じる。女性は男性と比較して異なる階級への移動は生じにくい。全体としてブルーカラーへの移動が促される。さらに、イベントヒストリー分析によって、年齢やライフステージ、学歴といった諸要因が無業を経る階級移動を男女それぞれ異なる形で媒介し、水路づけていることを示した。着目すべき点として以下を指摘できる。女性において専門管理は無業を経験しても戻りやすい階級として位置づけられている一方、半非熟練ブルーは無業との位置の近い不安定な階級としての位置を有していた。さらに、年齢・ライフステージの違いが男女で別様に働いていた。男性においては、年齢が高いことは労働市場への、とりわけ専門管理や事務販売、熟練ブルーといったより高度な技能を必要とするとされる階級への再参入を妨げる効果をもつ。女性においては、配偶者や子どもをもつことがとくにホワイトカラー（専門管理・事務販売）への再参入を妨げる効果をもつ。

第6章 無業経験が正規雇用獲得に与える影響

本章では、2005年SSM調査を用いて、無業経験がその後の正規雇用獲得にどのような影響を与えるかを、男女を比較しながら検討した。

正規雇用／非正規雇用は、労働市場において重大な格差をもたらす分断線の1つである。正規雇用を得られるかどうかは、入職時に正規雇用を得られたかどうか大きく左右される。しかしそれだけでなく、女性のキャリアに関する研究は、無業経験が非正規雇用への流入を生む契機であることを明らかにしている。本章の分析は、男女それぞれについて、正規雇用獲得にとって無業経験が重要な要因であることを示すものとして位置づけられる。

分析の結果、以下の点を明らかにした。まず初職・現職の2時点を用いた分析の結果、無業経験は初職で正規雇用に就くことの有利さを失わせ、非正規雇用獲得確率を低下させる。また職業経歴全体を対象として固定効果・ランダム効果ロジットモデルを用いた分析を行った結果、無業経験はその後の正規雇用獲得確率を20年近くにわたって低下させる。ただし時間の経過にともなう効果の変化の方向には男女差があり、男性は時間が経過しても正規雇用獲得確率はあまり上昇しないが、女性は時間が経過するにつれて徐々に正規雇用獲得確率が改善していくという変化を呈した。さらに無業経験の効果には年齢による異質性があり、男女とも、無業経験後の再参入年齢が高い場合には、正規雇用獲得確率がより大きく低下する。男性においてこの傾向は顕著であり、若年期の無業経験がその後の正

規雇用獲得確率を低下させる効果はかなり小さいが、壮年期以降の無業経験は正規雇用獲得によって大きなインパクトをもたらす。女性においては、若年期の無業経験の場合、いったん非正規として再参入してもその後正規雇用に戻っていく傾向が確認されたが、壮年期の場合はそうした傾向はほとんど見られなかった。

第7章 無業経験後の賃金の低下

本章では、JLPS2007-2012 を用いて、無業経験がその後の賃金をどの程度持続的に低下させるかについて分析を行った。

無業経験による賃金変動に関して、欧米では経済学・社会学を中心に研究が蓄積されている。日本でもいくつかの研究が行われているが、ここでは無業経験後の賃金の低下がどの程度持続的であるか、という点については十分に明らかになっていない。本章の分析は、たんに無業経験が賃金を低下させるということだけでなく、その効果が持続的であるかどうかにも焦点を当てる。なお賃金は定期給与および労働時間から求められた時間あたり賃金を用い、特別給与は含まない。

固定効果モデルを用いた分析の結果、男性においても、女性においても、無業経験はその後の賃金を少なくとも4~5年にわたって持続的に低下させることを明らかにした。さらにその程度は女性よりも男性においてより大きい。また無業経験はその後の賃金を低下させる一方、無業を経ない移動（転職）はそのように賃金を低下させる効果を持たないか、あるいは上昇させる効果を有していることを明らかにした。無業経験をともなう移動は、無業を経由しない移動は、賃金に与える影響という面では明らかに性質の異なる移動である。また無業経験が賃金に与える影響には年齢による異質性があり、男性においては壮年期以降の無業経験は若年期の無業経験よりも賃金を大きく低下させる。他方女性においては、壮年期以降の無業経験は若年期の無業経験よりも賃金の低下が小さい可能性が示された。

終章

終章では、分析によって得られた結果を改めてまとめ、議論を展開した。第1に、無業経験を媒介として労働市場における社会経済的地位の格差が拡大するプロセスについて、第2に、年齢による効果の異質性とその男女差について、第3に、男女のキャリアの文脈をなしている労働市場構造と家族の影響について議論を行った。

第1に、分析の結果から、低い社会経済的地位にある個人においてさらなる社会経済的地位の低下を招く無業経験が生起しやすく（第4章参照）、無業経験はその後の社会経済的地位を変動・持続的に低下させる（第5-7章）ことが示された。低い社会経済的地位にある個人は無業経験をしやすく、その結果、高い社会経済的地位にある個人との差が拡大するという累積する不利（Cumulative disadvantage）のプロセスが働いている。

他方で、こうした累積する不利のプロセスは男女で別様に働いている。とりわけこのプロセスは男性においてより顕著に働いているとみられる。なぜなら、男性の場合には無業経験が低い社会経済的地位において集中的に生じるイベントである一方、女性の場合はライフステージの変化がより重要な要因であり、社会経済的地位の効果は限定的であるからだ（第4章参照）。これは図終.1のように表せる。

図終.1 無業経験を通じた累積する不利のプロセスと男女差

男性 社会経済的地位 → 無業経験 → 社会経済的地位

女性 社会経済的地位 -----> 無業経験 → 社会経済的地位

第2に、無業経験がその後のキャリアにおよぼす影響には、年齢による異質性があった。男性の場合、年齢が高い場合に無業経験がその後のキャリアに及ぼす影響は顕著に大きくなる一方、女性についてはそうした関係は見られないか、見られても男性ほどには顕著でなかった。この背景には、男女のキャリア形成プロセスの分断がある。すなわち、年齢とキャリアの対応が強く、年齢を重ねるにしたがって労働市場のなかで地位を向上させていく男性に対して、年齢とキャリアの対応が弱く、年齢を重ねても地位の向上が見込めず報酬も増加しない女性という対比である。高い年齢の男性は、高い地位を得ており、かつキャリアの再形成が難しいために、無業経験の負の影響が大きくなっているものとみられる。こうした男女の異質性がいかなるメカニズムから生じているか、今後の研究が俟たれる。

第3に、社会経済的地位と家族が無業経験の生起、およびその後の影響に与える効果が男女で異なっていた。社会経済的地位に関して言えば、正規雇用／非正規雇用と大企業／小企業との間で無業経験のリスクに格差がある男性に対して、相対的にどの層も無業となりやすく、その意味で低い地位に抑えられている女性という対比が確認された。また家族についても、その効果は男女のキャリアに対してまったく逆方向に作用していた。すなわち家族を持つことは女性にとっては無業経験を生じさせる契機となるが、男性にとってはむしろこれを防ぎキャリア形成を有利に進める契機となる。ここで強調すべきは、ライフステージの違いが、女性だけでなく男性にとってもキャリア形成に影響を与えるという点だ。男性であっても、家族の影響からまったく独立してキャリア形成を行っているわけではないことに注意しなければならない。

表終.1 無業経験の有無と男女のマトリクス

無業経験	男性	女性
なし	A	C
あり	B	D

以上行ってきた無業経験の分析は、同性内の格差に関して新たな研究視角を提示する。表終.1にはこのことを簡単に図示した。既存の研究が前提としてきたのは、表終.1のAおよびDのようなキャリアであった。すなわち、男性は無業経験をもたず、高齢となり退職するまではキャリアを継続する。他方女性は無業を経験することでキャリアを中断する。こうした前提のもと、BおよびCのような男女は関心の外に置かれる。本研究はこれに対して、AとB、CとDの間に生じる格差を捉える視点を提供した。

本研究が示したのは、無業経験がキャリアを動揺させ、社会経済的地位を低下させるという点については、男女とも違いはないという点だ。さらにそれだけでなく、無業経験を生みだす社会経済的地位・家族の影響、あるいは年齢の違いによって無業経験の影響が異

なってくるという男女の違いもまた見出された。こうした点は、男女を同一の枠組みで比較分析することによってはじめて明らかになるものであったといえる。

残された課題として、以下の4点を挙げる。第1に、無業経験の内実（長さや休職期間、無業となった理由）を考慮した分析を行うことである。第2に、時代間の比較を行うことである。第3に、国家間の比較を行うことである。第4に、より長期間の社会経済的地位を視野に入れた分析を行うことである。今後、個人の職業や賃金の変化を明らかにできる回顧調査・パネル調査データを蓄積していくことで、こうした分析を進めることが可能となるだろう。